

K 君の事例

荒尾 良子
金城 朋子

母と子の印象

K君の母親が私たちの研究室へはじめて訪ねて来たときのこと
は、今でもはっきりと思い出すことが出来る。「御相談にのって
いただけますか。」といいながら、手さげの中から読みふるして
表紙のすりきれた育児書をとり出し、「この通りになかなかなら
なくて……。」と、ページをひろげるなり、涙に声が消えてしま
う。相談は予約制になっているのでその場合は、「あとで時間をと
ってゆっくりとお話ししましょう。」と帰ってもらったのだが、
気がかりで面接出来る日が心待たれるのだった。

約束の日、時間より早く二人は待合室に入った。「Kちゃん
ね。おまちどうさま。あちらのお部屋へ行って遊びましょう。」と
言う相談員に、「やだい！」と一声、母親はこちらへ告げてから、K
も私からは離れませんのよ。」と母親はこちらへ告げてから、K
に向かつて、「ほら、あっちで遊んでらっしゃい。」と促す。「Kち
ゃんは何で遊ぶのが好き？ あっちに積木なんかもあるわ。」「ぼ

くんちにだってたくさんあらあ、いらないよ！」「そう、たくさ
ん持ってるのね。」「そう だからいらない！」ずい分いばって
いる坊やである。ようやくどうやら話がついて、母親と別の室へ
入る。それから約四〇分の間、K君は、「こんなのもつといいの
がうちにあらあ、ママが買ってくれたんだもの。」といばりなが
ら、時折「もうママお話しすんだかどうか見てくる。」と隣室へ
も出たり入ったりしつづけた。

問 題 (困っていること)

母親の話によるとこうである。Kは毎夜のようにジンマシンと
喘息の発作がおこる。苦しくて寝ていられないので、注射をして
もらうために夜中に医者に通わなければならない。三つどきに
かかった百日咳の後遺症とのことだが、医者は多分に神経性のも
のだというらしい。この発作のために朝起きるのが遅くなり、毎
日のように遅刻してしまう。遅刻すると先生に叱られるので行き
たがらない。幼稚園では絵を描くことを極度にいやがる。自分が
下手だということを知っているのだ。Kは左利きなのである。右
が殆んど利かない。なおそうと思って一生懸命努力するのだが、
いまだになおっていない。不器用なので字はもう読めるのに書く
ことは駄目、体操も大嫌い。偏食はひどく、野菜類はいっさい口
に入れないので、ミキサーでこなして流し込む。神経質な傾

向も強く、新しいものを着せようとすると骨がおれる。最近では幼稚園へは行ってない。すると近所の子どもたちも仲間はずれにして遊んでくれないので淋しそうだ。だが家では母親自身が仕事をしていて自分で相手をしてやるのが出来ない。他人にまかせるとどうしても行き届かず、終日弟とけんかばかりしている。それに弟に比べて行為も遅いし、勇気もない。知能が遅れているのではないかと心配である。いったいどうしたらいいのかというのである。

方向づけのために（問題を規定している条件）

Kは当時四才十か月、月足らずで生まれたというが、身体はしっかりしている。家庭は階下が事務所になっている下町の商家。父母の他に第一人、叔母が二人、女中・店員が多数同居しているらしい。その二階で終日弟と二人、女中を相手に遊んでいるとのこと。

検査は全然うけつけない。だがことばつきや動作から、知能が遅れている様子はない。はじめての相談員との応待から、同年輩の子どもの中には入りにくいであろう様子が伺える。だが、にくらしげなことばのうしろから、甘えん坊の人なつっこさのぞいでいる。

母親は、自分で育児に専念出来ない事情にはあるが、拒否的な

感情は殆んどみられず、暇をみては育児書を読みあせり、懸命に努力している様子である。しかし、女中も妹たちも幼稚園の先生も信頼し得ず、まかせきることが出来ない。毎夜のジンマシンの発作にほとほと困りぬいているのである。

相談の上、二人には毎週通ってもらうことになった。K君には遊戯療法を、母親にはカウンセリングをしばらく続けることにしたからである。母親は仕事忙しいにもかかわらず、都合をつけてはK君と通って来た。

相談治療（方法と結果）

私たちはこのような相談治療を、主として非指示的方法に従って進めている。検査のような規定された場面には入ってゆけないK君なども、非指示的遊戯場面には抵抗も少なくて入ってゆける。

そして毎回五〇分のこの経験の中で、自分の力であそび、工夫し、自分をスムーズに表現し得たとき、普段の生活の中の緊張もほぐれてゆき、落ちついて行為出来るようになる。一方母親も、その時に自分の関心の中心になっている話題を自分で選択して、カウンセラーを相手に、心ゆくまで考えてみることが出来る。時には自分の生活のグチ話に五〇分を費すこともある。しかしその中で自分の見方やそれにまつわる自らの感情をみつめて、新しい事態へ立ち向かう自分のやり方を確認してゆくことが出来る。こ

うして得られた結果が、子どもとの生活に役立つと考えられる。

四か月程経つうちに、K君は遊戯場面の中で日ざましいと思われる進歩が見られた。玩具を出してみては、「こんなのもつといいのがうちにあらあ。」といばつては片づけていたはじめの段階が終ると、さかんにおしゃべりをしながら遊びはじめた。「これごはん入れるのいいね。」「これここに入れるんだ。」などなど一つの遊びに熱中する時間も次第に長くなり、洋服の汚れるのこともまわらない。そのうちに、「ぼくもう黙って遊ぶの、いちいち言わない。」とか、「ぼくよく汚すんだ。でも平気だね。この間汚したところきれいになってるもの。」など、自分の行為をとりあげて、あたかも自己統制をはじめたかのようなことをいいはじめた。母親の話によると、季節的な影響もあるが、近頃喘息の発作も回数が減って来たとのことである。母親もそろそろ幼稚園への心準備をはじめ、子どもを不安なく送り出せる気持になって来ている。

相談の経過をふり返って、私たちはこの事例を次のように説明してみようと思う。

解 釈（問題の形成）

Kは偏食がひどい。野菜類を全然口にしない。みかんを食べる時には、母親が特別に甘いのをえらんできれいに皮をむいてから

本人に渡す。嫌いなものを食べるのだから、なるべく食べやすいように心をつかってやるのである。他の人もそれに従うわけだが本人は食べない。母親は子どもに対する愛情が違うから、みかんのえらび方や皮のむき方におのずから相違があるのだという。このことからわかるように、母親の気持はKに密着し、一時もはなれずに生活している。しかし現実には多忙なので、平常は人にまかせられない。そこでKと接触できる時には、積っている気持を全部出して、Kの行為のすみずみにわたる心づかいを示すのである。危険なこと、お行儀、片づけ、手の使い方、絵の描き方、などなど、その上住居が市街地にあるため、子どもの遊び場がない。道路、二階いずれも子どもをひとり遊ばせておくには不安な場所なので、必ず人をつけておく。この母親の気持を知る人ならば、その子どもを預るのだから、とりわけ子どもに気をつかわざるを得ないだろう。子どもをする人は一時も子どもから眼をはなさずについている。

Kはこのような中で毎日の成長をつづけたようである。そして幼稚園へ入った。幼稚園では大勢の中だからKひとりに先生が注目してしてくれるわけではない。だが誰かにつかまっていなくて気がすまないKの表現は多少大げさになったにちがいない。紙芝居をしたときなど、「もう少し静かに見ましよう。」と注意を受けてしまう。また、誰かにたしかめないと何かをすることが出来

ない。特に左利きである。まだ右をじゅうぶんに使いこなせないばかりか、左の作業を禁じられているので絵を描くことなど自由にできない。それでもみんなが描くときには一しよに描かなければならない。幼稚園で絵が描けないと聞くと、家でも絵を描く練習をさせられる。遊戯なども同様である。

こうなってくると、身体の丈夫ではないKにとって毎日がだんだん負担になってくる。疲れると、夜喘息の発作がおこりやすくなってくる。発作がおこると幼稚園に遅れてしまう。先生は大勢の他の子どもたちがいるから、「なるべく遅れないように」とみんなの前では言ったのだろう。だがKやその母親にとって、その注意が本意である。喘息の発作には、心身ともに大きな負担を背負っているからである。

こうしてKは幼稚園から遠ざかることになってしまった。先生の心遣いに反して、母親には先生への不信任感、子どもには幼稚園への恐怖心というおみやげまで抱いて。

母親は育児書を懸命に読みあさる。だが育児書にはごく一般的な注意しか見られない。それらが具体的な子どもの状態に当てはまらないことを知ったとき、母親にはその距離ばかりが目についてしまったのであろう。

今後の見透し

私たちは四か月余りの相談を通して、Kの母の話から拾いあげた材料をもとにして、このような一つの過程を組み立ててみた。

だが、これが正しいと言いつける自信は全くない。だから私たちはこれから出発した方向づけを、この事例の今後の相談に役に立てようとは考えていない。現にKの母は、私たちがここにゆきついた四か月の間にすでに方向を転換して、今は自ら整理して新しい方向づけに沿って生活を開始しているのである。Kは以前に比べて明るくなった。そして落ちついて自分の行爲をつづけることが出来るようになった。最近では近所の子どもたちとも遊んでいるという。だが、まだ絵を描くことは出来ていない。左を使うこともそのままである。偏食もなおっていない。それでも母親はKが成長したことを認めている。そして自分がそうはらはらしなくともよきそうだという。

居住地のことや、家庭の事情を考えると、Kは一日も早く幼稚園に行けるようになるかと思う。集団生活の中で自由にふるまえるようになったら、絵も遊戯もみんなと一しよにするだろうし、夢中で元気に遊べたら、お腹をすかして偏食もなおるのではないかと思う。絵を描かせよう、右を使わせよう、というあせりに時折つまずきながらも、こう言った見透しは私たち以上に母の中に生かすはじめているらしい。もう一步の成長をめざして、私たちもあせらずにK君たちと歩もうと思う。(お茶の水女子大学)